

# 文学教材で何を読むのか — 芥川龍之介『羅生門』の場合 —

廻野 聡 紘

## 一、目的

学習活動の場において、文学教材を用いることの意義とはなにか、文学教材で何を読み、どのような学習活動が実現すれば、その意義が達成できたと言えるのか考察するものである。

田中実 (1996 i) <sup>1</sup> は、読むという行為を次のように述べている。

読むことは、客観的対象としての〈本文〉を読者の体験や感性に応じて自己の造りだした主観的な〈本文〉によって読んでいくことである。ならば、読まれた後の客観的対象としての〈本文〉は単なる物、活字でしかなく、読者のなかには主観的な〈本文〉しか存在しない。読むとは自己を読むのであって、この客観的対象としての〈本文〉は読者のなかでは確かに消去されているのである。だが、読者が主観的〈本文〉を造り出しているだけでなく、その主観的であるはずの〈本文〉の〈ことばの仕組み〉はそれまでの読者を新たな読者へと造り変えてもいるのではないか。主観的〈本文〉が読み手を揺さぶり、倒壊させ、造り変える力を持ち、その主観的な領域を踏み破る運動を起している。この事実を看過することはできない。読者は主観的〈本文〉と対決し、格闘し続けることによって、己の主観的〈本文〉自体を倒壊させることにもなるのである。読み深めるとは本来このことを指すのである。すなわち、読者にとって〈本文〉は到達不可能な《他者》であり、分析され、理解されることを拒否しながら、その拒否する〈本文〉との葛藤、対決が読者主体の殻をきしませ、変革させていくのであり、そこには〈自己内対話〉を超えた〈本文〉との対話が始まっているのである。(18-19頁) (傍点・下線は引用者)

ここに表されていることを言い換えると、本文を読む際、自分なりの解釈によって自分が造りだした意味を持った本文を読んでいるが、その反面、自分が造りだした意味であっても、その本文によって、自分の既存の認識や解釈が変容させられている、

ということである。

文学教材を読むことで、生徒たちは様々な感想、意見を抱くことであろうが、学習活動が自分勝手な読みの段階でとどまる限り、生徒たちの読みで田中実の言うような認識の変容は起こらない。生徒たちが文学教材を読むことで、それまで持っていた価値観や認識が変容し、その作品教材を自分の中で、自分のこととして考え、掘り下げることができる力の育成を目指したい。

しかし、文学教材を価値観・認識の変容につなげるためには、生徒たちに、言語技術・読みの技術が必要不可欠である。文学教材の本文の表現や構造を意識した読みができなければ、価値観・認識の変容など起こり得ない。

したがって、学習活動の場においては、生徒たちの読みの技術が、生徒たち自身の認識の変容へつながったときに、初めて、その学習活動で文学教材を用いる意義が達成されたと言えるのではないだろうか。

そもそも、国語の授業に用いられる文学教材には、生徒たちの読みの技術をはぐくみ、認識の変容を促すだけの価値が必要であると考ええる。

ここで、一つの例として、芥川龍之介『羅生門』を取り上げる。『羅生門』は現在、10教科書会社24教科書中24教科書（すべての教科書）に採用されている。国語総合は高校一年生の必修科目であり、その全教科書に羅生門が採用されていることになる。つまり、日本のすべての高校生が『羅生門』という教材を学んでいる、ということである。『羅生門』は現在の高校一年生の必修教材と言える状況である。

では、『羅生門』を読むことで生徒たちの認識を変容させることはできるのだろうか、できるのであれば、どのように扱うことでそれが可能であるのか考察していきたい。

## 二、これまでの『羅生門』の扱われ方

これまで、『羅生門』という作品はどのように読まれ、どのように扱われてきたのであろうか。

羅生門史については、多数存在し、ここでは精査できないため、丹藤博文(2010)<sup>2</sup>がまとめている『羅生門』の読まれ方の概歴を引用する。

『羅生門』の主題として初期に流布したのは吉田精一(一九五八)のエゴイズム説であろう。吉田は「下人の心理の推移を主題とし、あわせて生きんが為に、各人各様に待たざるを得ぬエゴイズムをあばいているものである。(中略)善にも悪にも徹し得ない不安定な人間の姿をそこに見た。」(六二頁)とした。吉田は、『羅生門』論として先行の岩上順一のマルクス主義的な読みと異を唱えたのである。吉田説に影響されながらも、駒沢喜美(一九七二)は「善にも悪にも徹し得ない不安定な人間の姿」を見ているのでは

なく、「善と悪を同時に併存させているところの矛盾体である人間そのものを、さしだしていると思うのだ。」(二八頁)とする。吉田にせよ駒沢にせよ、読みの根拠を作家の伝記的な事実を求める、あるいは周辺のテキストを実体化して根拠たらしめるという素朴な反映論の範囲を出るものではない。

これに対して、三好行雄 (一九七六) は作品論の立場から、「エゴイズムなどという概念では決して律しきれない」「倫理の終焉する場所」として羅生門の世界をおさえたいうえで、下人にとって「新しい認識の世界」であったが「悪が悪の名において悪を許す」という「虚無」の対象化でしかなく、「いかなる救済をもうちにふくまぬ<無明の闇>」に沈むほかないとした。

このような「エゴイズム」「悪」「虚無」「無明の闇」といった所謂<暗い『羅生門』論>に対して、八〇年代の頃から、<明るい『羅生門』論>が始まる。関口安義 (一九九三) は、下人の行動は「革命の叫び」「解放の叫び」であるとし、首藤基澄 (一九八三) は「ダイナミックな行動者」になったといい、海老井英次 (一九八三) は「生きぬく創造的な生き方への下人の覚醒を描いた作品」とした。「無明の闇」に行方をくらす認識者としての「下人」は、「解放の叫び」をあげながら、「覚醒」し「ダイナミックな行動者」として変身したかのようなのである。

さらに、八〇年代以降は、国文学研究にも構造主義・物語論・記号論・語り論など方法的論的アプローチが多様に試みられるようになる。『羅生門』論においても三谷邦明の「通過儀礼」説、平岡敏夫の「異空間」説、田中実の語りによるメタプロットを明らかにする説など様々な論が提出された。(122-123頁)

現在でも主流の読みとして広く読まれているエゴイズム(ここでのエゴイズムとは、生きるために悪を冒すことは仕方がないという考え方のことを指す。)説をはじめとして、暗い『羅生門』論、明るい『羅生門』論に続き、通過儀礼、異空間、語り論など、様々な説が挙げられてきた。このように、『羅生門』研究においては、解釈者が自分の関心にひきつけた意味づけをする。そのため、多様な意味が見出されている。これらの言及対象から、物語の描かれ方や構造、登場人物の人物像、書き手の思想やテーマ、作家の伝記的事実や周辺テキストといった要素を取り出すことができる。

では、学習活動の場では、作品の何を問題として扱っているだろうか。

### 三、学校教育における『羅生門』の扱われ方

ここでは、高等学校国語総合の教科書、本文末尾に掲載されている学習の手引きについて考察する(表参照)。漢字の書き取りや、用語など、語彙に関する問いは省いた。同じ教科書会社でまったく同じ設問を設けている教科書を除く16教科書について、

内容読解に関するものと、学習活動に関するものに二分して分析を試みる。

### 第一節 内容読解に関わる問いについて

#### (1) <登場人物の心情の理解>

関連した問いが16教科書中の全教科書に33も設問があり、一つの教科書につき約二つ設問が設けられていることになる。その二つとは、「次の場面における下人の心理をまとめてみよう。」(教育出版)に見られる、老婆の行動に起因する下人の感情の変化を把握するものと、「次の勇気について、それぞれどのような『勇気』か、まとめてみよう。」(明治書院)に見られる、自分の行動を決定づける下人の勇気の推移を把握するものである。盗人になる勇気を持ってなかった下人は、楼の上で髪の毛を抜く老婆の姿を見て、悪に対する反感を覚える。この反感が、下人に、盗人になるのとは反対の方へ進む勇気を与え、老婆を取り押さえる。そうしたかと思えば、老婆の話を聞き、盗人になる勇気を得て引剥ぎをする。下人は、その時々感情に左右され、勇気の形態すらも変化させていくのである。このように、下人の感情と勇気は本来、密接な関係にあるはずだが、これらを関連させて問う教科書はない。単なる勇気の性質を問うのではなく、なぜその勇気生まれるに至ったのかを、感情の変化とともに捉えることで、老婆を認識することなしに行動する下人の姿が読めるはずである。そのため、これらは関連づけて問う必要がある。

#### (2) <場面や情景・設定の把握>

16教科書に23の設問があり、「この小説の展開を、場面のうえから四つに分けてみよう。」(第一出版社)のように、小説を四つの場面に分けるもの、「『羅生門』付近の雰囲気の説明してみよう。」(数研出版)のような、場面の情景を理解するもの、「二人の登場人物はどのような境遇におかれていたか。」(東京書籍)のような、登場人物の設定を把握するもの、に分けられる。これらは、何が書いてあるのかを正確に読むための基礎作業として、教科書会社が注目すべき箇所をすでに指摘している。しかし、問いとして注目すべき点を示すことによって、生徒の視点が限定されてしまう恐れもある。気になる表現について読みを交流し合うなどの広い視野を持たせる工夫も必要だろう。

#### (3) <表現の特徴と効果>

16教科書中15の教科書で扱われており、25の設問がある。一つの教科書に対して、複数の設問が設けられている。そのうちのほとんどが、「本文中から動物を使った比喩を抜き出して、その効果を考えてみよう。」(筑摩書房)に見られる、動物を使った比喩表現の効果について問うものである。その他少数の問いとして、「この作品に繰り返し出てくる『にきび』の描写について、考えてみよう。」(三省堂)のような「にきび」の描写の効果や、「冒頭と結びの一文は、それぞれどのような表現効果を上げ

ているか、考えてみよう。」(教育出版)のような始末の一文の効果を問うものなどがある。描写や比喩表現の特徴と効果を考えるものは、小説の表現の仕方を知ることや、文学の読み方を教えるというねらいがあろう。ただ、その表現を用いる意味を問うものが一つもないことは、問題である。表現の特徴や効果を追うだけでなく、その表現が用いられる意味まで考えれば、書き手が表現しようとした、動物などの比喩表現で表されるような人間の内面をも読み取ることができるはずである。

#### (4) <老婆の論理の整理>

16教科書中12教科書にそれぞれ1問ずつあり、「老婆の会話文から、老婆の、自己の行為についての弁明の要点を二点にまとめてみよう。」(明治書院)のような、老婆の自己正当化の論理をまとめるものである。この老婆の論理は、下人の盗人になる勇気につながるものであるため、<登場人物の心情の理解>に含めても良いかもしれない。この問いの多くは、老婆の論理を整理するだけで終わってしまっている。「老婆の主張の中心は何か。また、この老婆の告白を聞いた下人がなぜ『引剥』をする気になったのか、考えてみよう。」のように、下人の勇気と呼応させて扱っている問いは、12問中3問である。だが、老婆の論理が下人に与えた影響を問うだけでは、結局のところ、「盗人になる勇気を得た」という局所に行きあたるのみである。そこで、下人が老婆の論理をどのように理解したかを考える必要がある。老婆の主張する論理と、下人の了解した論理はどう違ったのか。両者を比較して突き詰めると、老婆の立場と下人の立場が同じでないことに気付くはずだ。下人は、老婆と同じ立場に立つことなく、異なる立場にある老婆の表層の正当化の論理だけを我が物として盗人になる。ここに、下人が老婆を認識することなく、その場の状況によって無理解に自己の行動を決定付けるような人物であるという人間性、人物像が見えてくるのである。

#### (5) <人物像の把握>

16ある教科書のうち、数研出版の1つの設問しかなく、「『下人』の人物像を描いてみよう。」という問いのみである。ここでの人物像とは、強調された人間性の一面と言い換えることができるだろう。この人物像の把握は、心情理解の先に見えてくるものであるが、登場人物の心情の変化を把握するための問いが33もあるにもかかわらず、人物像を把握するための問いは1問だけである。心情把握だけで、人物像について触れなければ、生徒たちの羅生門の読みは感情移入の域から出ることはできない。しかも、数研出版の問いであっても、「人物像を描いてみよう」という漠然としたものであるため、物語の主人公としての下人のキャラクター設定で終わってしまいがちである。

『羅生門』にはいくつかの草稿があり、「主人公が交野平六という固有名詞をもっていた段階から、単に男あるいは侍と設定されて」<sup>3</sup> (12頁) いる。草稿において、

交野平六という固有名詞を与えられていた男が、定稿において下人という一般名詞化されたとき、下人は、個人としての下人ではなくなった。普遍的な誰もが持っている人間性の一面が、下人の人間性にデフォルメされたのである。

## 第二節 学習活動に関わる設問について

### (1) <自分の感想や意見とその交流>

全16教科書に設問が22あり、学習活動に関わる設問の半数以上がこれに当たる。感想や話し合う内容は様々であるが、第一学習社の教師用指導書では、感想を書いた際の評価のポイントとして「①自分が最も関心を持った事柄に対して、感想が十分に述べられているかどうか。②作品の内容と自分の意見が、区別されているかどうか。③自分の実感に基づく言葉で、わかりやすく感想が述べられているかどうか。」の三点が挙げられている。第一学習社の評価の観点から見られることは、感想を書くことの意味は、自分の考えや読みを深めるためのものではなく、感想文を「書く能力」を育成することのねらいである。感想は、主題に関わることに焦点を絞って書かせ、それぞれの解釈を交流し合うことで、様々な考えに触れ、なぜそう考えることができるのかを中心に、自他の読みを深める契機としたい。

### (2) <物語の続きを考える>

16教科書中7教科書にそれぞれ1問ずつ扱われており、「下人はこのあとどうなったか、物語ふうに書こう。」(三省堂)に見られるような、物語のその後を想像する問いである。東京書籍の教師用指導書では、下人のその後を想像し、話しあう設問のねらいを「小説の読解のうえに立って、生徒に自分の考えを持たせる。」としている。指導書のねらいは、考えを持たせる段階でとどまっており、下人のその後を話し合うことに特別な意味が与えられていない。

そもそも、下人のその後の様子を想像することに何の意味があるのだろうか。『羅生門』の末尾の一文は周知のように、「下人は、すでに、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」という道筋が決定付けられた既定の結末から、「下人の行方は、だれも知らない。」と、語りを完結させない不定の結末へと改稿されたのである。作者自身が、既定の結末を、不定の結末へ変更したものの続きを書くというのは、いかにも蛇足というものであろう。それよりも、「下人の行方は、だれも知らない。」とすることによって何が読み取れるのか、そこで終わることの意味を考えるべきではないか。学習の手引きの中には「冒頭と結びの一文は、それぞれどのような表現効果を上げているか、考えてみよう。」(教育出版)のように、結びの一文の表現効果を問うものもあるが、「余韻を残す」のような、表現の問題の域からは出ることができない。

### (3) <改稿の効果>

16教科書中3教科書でそれぞれ1問ずつ扱っている。「作品末尾の『下人の行方は、だれも知らない。』の部分は、当初は『下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。』となっている。なぜこのように改めたのか、意見を述べ合ってみよう。」(右文書院)のような問いである。改稿について考えることは、下人の認識のやり方を問題として扱う上で、テーマについて迫れるものであると考えるが、既に述べたように、表現の域を超えて考えを深めなければならない。

### (4) <原典との比較>

16教科書中3教科書でそれぞれ1問ずつ扱っている。「本文と『今昔物語集』の卷二十九『羅城門登上層見死人盗人語第十八』とを読み比べ、本文と違う点をまとめてみよう。」(明治書院)のように、原典となった「今昔物語集」と比較するものである。原典と比較し、どのような違いがあるのかを見ていくことで、語り手が描こうとした下人の人間性が、「今昔物語集」のそれと異なった姿としてより鮮明に現れるだろう。

### (5) <作者の考えの理解>

16教科書中一つの教科書でしか扱われておらず、「作者はこの小説で何を語ろうとしていたのか、考えてみよう。」(旺文社)というものである。主題を考えるものとはいえ、これまでの読みを統括し、授業を締めくくするのに適した設問である。しかし、『羅生門』の主題は諸説あり、指導書にも多数の説を紹介しているほどである。生徒が多数の研究者たちによって論じられた解釈を提示された際に、自分の読みが間違っているのではないかと混乱してしまう危険性をはらんでいるともいえる。生徒の読みの多様性を否定しない配慮が必要である。

### (6) <他作品との比較>

16教科書中3教科書でそれぞれ1問ずつ扱っている。芥川の他の作品や、今まで読んできた小説と比較するものであり、文学史的な位置づけが強く、内容の読みを深めるためのものではない。

### (7) <調べ学習>

16教科書中1教科書のみで、『『申の刻下がり』という時刻表示があるが、十二支による時刻の表し方を付録を参考にして覚えよう。また、十二支以外の時刻表示にはどのようなものがあるか、調べてみよう。』(明治書院)というものである。これもまた、読み深めにつながるような問いではない。

文学教材で何を読むのか - 芥川龍之介『羅生門』の場合 -

学習の手引き分析				内容				学習活動										
ID	出版社	教科書名	単元名	学習の手引き	表現の特徴と効果	場面や情景描写、設定の把握	登場人物の心情の理解	老婆の論理の整理	人物像の把握	あらすじの把握	作者の考えの理解	自分の感想や意見とその交流	調べ学習	他作品との比較	原典との比較	改稿の効果	物語の続きを考へる	
1	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「下人」の気持ちとは、次の1～5の場面では、それぞれどのように動いて行ったか、矢印(→)などを用いて整理してみよう。					○									
2	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「この小説は、「下人の行方は、だれも知らない。」で終わっているが、「下人」はこの後、どうなったと想像するか、話し合ってみよう。							○						○	
3	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	・次の1、2の部分ではどのようなことが述べられているか、傍線部に注意して説明してみよう。 1この場所 2勇氣					○									
4	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「ごまをまいたように」と同じような比喩表現を抜き出し、それぞれどのような表現効果を持っているか、考えてみよう。	○													
5	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「老婆」の主張する内容を簡潔にまとめてみよう。				○										
6	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「羅生門はどこにあったか。また、この時代には、どのような状態にあったか。」		○												
7	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「この小説の中の季節はいつごろか。また、時間は、一日のうち、いつごろからいつごろまでか。」		○												
8	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「二人の登場人物はどのような境遇におかれていたか。」		○												
9	東京書籍	新編国語総合	小説二 人間の心理	「羅生門」のように、古典に取材した芥川龍之介の他の作品を読んでみよう。										○				
10	東京書籍	精選国語総合	小説①	・場面の变化に注意して、全体を幾つかに部分に分けてみよう。更に、場面の变化に基づいて、下人の行動と心理の移り変わりを整理してみよう。	○		○											
11	東京書籍	精選国語総合	小説①	「下人の考えや行動についてどう思うか、自由に話し合ってみよう。」					○		○							
12	東京書籍	精選国語総合	小説①	「この小説には、動物を使った比喩表現が多く用いられている。このような例を抜き出し、それらが全体としてどのような効果をおいているか、考えてみよう。」	○													
13	東京書籍	精選国語総合	小説①	・次の傍線部の内容を確かめてみよう。 1この場所 2ある強い感情 3勇氣					○									
14	東京書籍	精選国語総合	小説①	・老婆の主語の中心は何か。また、この老婆の告白を聞いた下人がなぜ「引刺」をする気になったのか、考えてみよう。」				○	○		○							
15	東京書籍	精選国語総合	小説①	・この小説のあらすじを簡単にまとめてみよう。」						○								
16	大修館書店	国語総合改訂版	小説(一)	「樓上へ上る下人の感情は、樓下の下段・中段・上段とそれぞれ書き分けられている。それぞれまとめてみよう。」					○									
17	大修館書店	国語総合改訂版	小説(一)	「六分の恐怖と四分の好奇心」はどのように変わっていったか。」					○									
18	大修館書店	国語総合改訂版	小説(一)	「本文には、「この雨の夜に、この羅生門の上で。」という同一の表現が二か所あるが、二つを比較しながら、その効果、下人の心情について、考えてみよう。」	○				○									
19	大修館書店	国語総合改訂版	小説(一)	「「そのときの、……追い出されていた。」とあるが、下人がそういう気持ちになったのはなぜか。」														
20	大修館書店	国語総合改訂版	小説(一)	「この小説は、「ある日の暮れ方のごとである。」とはじまっているが、この書き出しについて、感じたことを話し合ってみよう。」							○							
21	大修館書店	国語総合改訂版	小説(一)	「この小説の結びの部分から、どのような印象を受けたか。四〇〇字程度にまとめてみよう。」	○							○						
22	大修館書店	国語総合改訂版	小説(一)	「表現の上から見て、次の①②はどのような効果をおいているか。 ①内柱の「變蜂」 ②下人の「いきび」」	○	○												
23	大修館書店	新編国語総合改訂版	読みを深める	「次のそれぞれの場面の下人の心理をまとめてみよう。」					○									
24	大修館書店	新編国語総合改訂版	読みを深める	「この作品に描かれた情景の中で印象に残ったところを挙げてみよう。」		○												
25	大修館書店	新編国語総合改訂版	読みを深める	「この小説では、次の表現が繰り返し使われている。その効果について話し合ってみよう。①下人の「いきび」②登場人物を動物になぞらえた表現」			○											
26	大修館書店	新編国語総合改訂版	読みを深める	「これまで学習したほかの小説と比べて、「羅生門」の特色を六〇〇字程度にまとめてみよう。」	○							○			○			
27	第一学習社	改訂版高等学校国語総合	小説(一)	「次のそれぞれの場面における下人の心理について考え、下人の心理の推移をまとめてみよう。」					○									
28	第一学習社	改訂版高等学校国語総合	小説(一)	「この小説の中で、自分が最も関心を持った事柄を中心に、八百字程度の感想文を書いてみよう。」							○							
29	第一学習社	改訂版高等学校国語総合	小説(一)	「「やもりのように」などの動物を使った比喩を、本文中から探し出してみよう。」	○													
30	第一学習社	改訂版高等学校国語総合	小説(一)	「老婆が自己を正当化する論理の要点を二つあげてみよう。」				○										



学習の手引き分析				内容				学習活動							
ID	出版社	教科書名	単元名 学習の手引き	表現の特徴と効果	場面や情懷・設定の把握	登場人物の心情の整理	人物像の把握	あらすじの把握	作者の考えの理解	自分の感想や意見とその文流	調べ学習	他作品との比較	原典との比較	改稿の効果	物語の続きを考える
31	第一学習社	改訂版高等学校国語総合	小説(一)	この小説の展開を、場面のうえから四つに分けてみよう。	○										
32	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	次の場面における下人の心理をまとめてみよう。			○								
33	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「老婆の話を聞いたあとの下人の行動についてどう思うか、話し合ってみよう。					○						
34	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「この作品から動物を使った直喩表現を抜き出し、それらがどのような効果を上げているか、考えてみよう。	○										
35	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「冒頭と結びの一文は、それぞれどのような表現効果を出しているか、考えてみよう。	○										
36	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「老婆の考え方を整理しよう。また、老婆の主張の中心は何か、考えてみよう。		○									
37	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「この作品はどのような時代と社会を舞台にしているか、まとめてみよう。	○										
38	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「下人の境遇についてまとめてみよう。	○										
39	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「この作品を時刻の推移や場面の転換から四つの段落に分けよう。	○										
40	教育出版	新国語総合改訂版	小説は問いかける 小説三	「この『羅生門』の題材となった『今昔物語集』中の話を読んでみよう。								○			
41	筑摩書房	国語総合改訂版	小説①	「次の場面にそって、それぞれ「下人」の気持ちをまとめ、その変化をたどってみよう。			○								
42	筑摩書房	国語総合改訂版	小説①	「「死に危をにするか盗人になるか」以外に、「下人」のとることのできる行動を考えてみよう。また、この物語のあと「下人」はどのようなか、続きをノートに書いてみよう。					○					○	
43	筑摩書房	国語総合改訂版	小説①	「本文中から動物を使った比喩を抜き出して、その効果を考えてみよう。	○										
44	筑摩書房	国語総合改訂版	小説①	「蛇」を「干し魚」だと遊んで売っていた「女」を、「老婆」はどのように見ていたか、それを踏まえて、「老婆」の考え方をまとめてみよう。		○									
45	筑摩書房	国語総合改訂版	小説①	「この小説の舞台となっている「門」とはどのような場所にあるのか、また、「暮れ方」とはどのような時間なのか、考えておこう。		○									
46	数研出版	国語総合	小説(一)	「下人」がいる場所や状況は次の(1)~(4)に分け、「下人」の心情をそれぞれまとめてみよう。	○	○									
47	数研出版	国語総合	小説(一)	「下人」はこの後どうしたと考えられるか、自分の意見を文章にまとめてみよう。					○						○
48	数研出版	国語総合	小説(一)	「本文中に四度述べられる「面皷」、作品中でどのような効果を上げているか、話し合ってみよう。	○				○						
49	数研出版	国語総合	小説(一)	「本文には比喩表現が多用されている。それらどのような効果を上げているか、それぞれ説明してみよう。	○										
50	数研出版	国語総合	小説(一)	「老婆」はどのような考え方のもとで、死骸の壁の手を抜いているのか、まとめてみよう。		○									
51	数研出版	国語総合	小説(一)	「羅生門」付近の雰囲気の説明してみよう。	○										
52	数研出版	国語総合	小説(一)	「下人」の人物像を描いてみよう。			○								
53	数研出版	国語総合	小説(一)	「この作品の結末部分は、当初「下人は、すでに、雨を見て、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった」と書かれていたが、後に「下人の行方は、誰も知らない。」と書き換えられた。このことによつて読者の印象はどのように変わるか、話し合ってみよう。						○					○
54	明治書院	高校生の国語総合	小説を味わう	「下人の老婆に対する心理の変化とその変化に至る理由とを、「六分の恐怖と四分の好奇心」、「激しい憎悪」、「失望」、「悔慮」、「あざける」などの本文中の語句を手帳から、整理してみよう。			○								
55	明治書院	高校生の国語総合	小説を味わう	「次の勇気について、それぞれどのような「勇気」か、まとめてみよう。			○								
56	明治書院	高校生の国語総合	小説を味わう	「下人は老婆の話をどのように解釈したか、グループに分かれて話し合ってみよう。		○				○					
57	明治書院	高校生の国語総合	小説を味わう	「下人が選んだ生き方に対して、感想を文章にまとめてみよう。また、その後の下人の運命について想像して、話し合ってみよう。					○						○
58	明治書院	高校生の国語総合	小説を味わう	「この物語の背景となる時代の社会状況を、本文の中からまとめてみよう。	○										
59	明治書院	高校生の国語総合	小説を味わう	「甲の刻下がり」という時刻表示があるが、十二支による時刻の表し方を付録を参考にして覚えよう。また、十二支以外の時刻表示にはどのようなものがあるか、調べてみよう。						○					
60	明治書院	高校生の国語総合	小説を味わう	「本文と『今昔物語集』の巻二十九「羅城門登上层見死人盗人語第十八」を比べて、本文と違う点をまとめてみよう。								○			
61	明治書院	新精選国語総合	小説(1)	「この小説の構成を四つの場面に分け、それぞれの場面で「下人」の心理の移り変わりを整理してみよう。	○	○									

文学教材で何をを読むのか - 芥川龍之介『羅生門』の場合 -

学習の手引き分析				内容	学習活動										
ID	出版社	教科書名	単元名 学習の手引き		表現の特徴と効果	場面や情景、設定の把握	登場人物の心情の理解	あらすじの把握	作者の考えの理解	自分の感想や意見とそれとの交流	調べ学習	他作品との比較	原典との比較	改稿の効果	物語の続きを考へる
62	明治書院	新精選国語総合	小説(1)	・老婆の話に対する下人の行動について、肯定・否定の立場に分かれて、意見を翻わせてみよう。					○						
63	明治書院	新精選国語総合	小説(1)	・末尾の一文から想像される下人のその後の姿を文章にまとめてみよう。										○	
64	明治書院	新精選国語総合	小説(1)	・本文中から動物を用いた比喩表現を抜き出し、その効果について考えてみよう。	○										
65	明治書院	新精選国語総合	小説(1)	・老婆の余話から、老婆の、自己の行為についての弁明の要点を二点にまとめてみよう。			○								
66	明治書院	新精選国語総合	小説(1)	・下人の「勇氣」は、どのようなものか、整理してまとめてみよう。			○								
67	明治書院	新精選国語総合	小説(1)	・本文どし今昔物語集の巻二十九「羅城門登上層見死人盗人語第十八」とを読み比べ、本文と違う点をまとめてみよう。									○		
68	右文書院	国語総合	小説(1)	・次のそれぞれの場面における下人の心理をまとめてみよう。			○								
69	右文書院	国語総合	小説(1)	・次の「勇氣」について具体的に説明してみよう。			○								
70	右文書院	国語総合	小説(1)	・「雨は、羅生門をつつんで、……重たくうす暗い雲を支えている。」という描写は下人の心理とどのように対応しているか、説明してみよう。	○		○								
71	右文書院	国語総合	小説(1)	・この作品の中に用いられている比喩表現を抜き出してみよう。	○										
72	右文書院	国語総合	小説(1)	・作品に描かれている次の事項について整理してみよう。 ①主人公の身分・年齢・境遇②時代及びその世相③季節④時刻⑤場所及びその状況⑥天候		○									
73	右文書院	国語総合	小説(1)	・作品末尾の「下人の行方は、だれも知らない。」の部分は、当初は「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」となっている。なぜこのように改めたのか、意見を述べ合ってみよう。					○				○		
74	三省堂	高等学校国語総合改訂版	小説(一)	・下人が羅生門の下に至るまでの経緯を整理し、門の下での下人の心情について考えてみよう。	○		○								
75	三省堂	高等学校国語総合改訂版	小説(一)	・羅生門の様に登って以降の下人の心理の推移を筋書きにして、整理してみよう。			○								
76	三省堂	高等学校国語総合改訂版	小説(一)	・この作品の背景となっている京都の町や羅生門の描写を整理し、そこに描かれている当時の社会状況についてまとめてみよう。		○									
77	三省堂	高等学校国語総合改訂版	小説(一)	・老婆は自己の行為についてどのように語っているか、整理してみよう。			○								
78	三省堂	高等学校国語総合改訂版	小説(一)	・この作品に繰り返し出てくる「にきび」の描写について、考えてみよう。	○										
79	三省堂	高等学校国語総合改訂版	小説(一)	・次の語句の表現効果について考えてみよう。 ①「きりぎりす」や「からす」について。 ②「猫のように身を縮めて」などの動物を使った比喩について。	○										
80	三省堂	高等学校国語総合改訂版	小説(一)	・この作品を読んで考えたことを、八百字程度の文章にまとめてみよう。					○						
81	三省堂	新編国語総合改訂版	小説	・下人が羅生門の下に至るまでの経緯を整理し、門の下での下人の心情について考えてみよう。	○		○								
82	三省堂	新編国語総合改訂版	小説	・羅生門の様に登って以降の下人の心理の推移を筋書きにして、整理してみよう。			○								
83	三省堂	新編国語総合改訂版	小説	・この作品の背景となっている京都の町や羅生門の描写を整理し、そこに描かれている当時の社会状況についてまとめてみよう。		○									
84	三省堂	新編国語総合改訂版	小説	・老婆は自己の行為についてどのように語っているか、整理してみよう。			○	○							
85	三省堂	新編国語総合改訂版	小説	・この作品に繰り返し出てくる「にきび」の描写について、考えてみよう。	○										
86	三省堂	新編国語総合改訂版	小説	・次の語句の表現効果について考えてみよう。 ①「きりぎりす」や「からす」について。 ②「猫のように身を縮めて」などの動物を使った比喩について。	○										
88	三省堂	新編国語総合改訂版	小説	・この作品は、「下人の行方は、だれも知らない。」という一文で終わっているが、下人はこの後どうなったと思うか、話をつけてみよう。						○				○	
89	三省堂	明解国語総合	小説をたのしむ-2	・次の観点にしたがって、物語の設定をとらえよう。 ①いつ②どこ③だれが	○										
90	三省堂	明解国語総合	小説をたのしむ-2	・次の場面における下人の心理はそれぞれどのようなものか、まとめてみよう。			○								
91	三省堂	明解国語総合	小説をたのしむ-2	・老婆は、「死人の髪を抜くことをどう思っているか。また、その理由をどのように言っているか、まとめてみよう。			○								
92	三省堂	明解国語総合	小説をたのしむ-2	・教科書80ページから83ページの中にある動物を使った比喩表現をすべて抜き出し、それがどうしているかを表しているか話し合おう。	○				○						

学習の手引き分析				内容				学習活動									
ID	出版社	教科書名	単元名	学習の手引き	表現の特徴と効果	場面や情景・設定の把握	老婆の論理の整理	登場人物の心情の理解	人物像の把握	あらすじの把握	作者の考えの理解	自分の感想や意見とその文流	調べ学習	他作品との比較	原典との比較	改稿の効果	物語の続きを考える
93	三省堂	明解国語総合	小説をたのしむ-2	「下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」とあるが、この「勇気」について、次の点から考えをまとめよう。 ①どういう「勇気」か。 ②なぜ「勇気」が生まれてきたのか。					○								
94	三省堂	明解国語総合	小説をたのしむ-2	下人はこのあとどうなったか、物語ふうに書こう。													○
95	三省堂	明解国語総合	小説をたのしむ-2	下人が去ったあと、老婆は「黒洞々たる夜」をのぞいて、どんなことを考えたか、話し合おう。					○		○						
96	桐原書店	展開国語総合改訂版	小説Ⅱ	この小説を下人の心理・行動の変化にしたがって四つの場面に分け、それぞれの場面で下人の心理を描写している部分を抜き出し、その変化のようすを整理してみよう。	○				○								
97	桐原書店	展開国語総合改訂版	小説Ⅱ	本文中西か所に見られる下人の「にきび」の描写は、物語の展開上どのような効果を上げているか、説明してみよう。	○												
98	桐原書店	展開国語総合改訂版	小説Ⅱ	この小説が初めて発表されたとき、最後の一文は「下人は、すでに、雨を習して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつづつあった。」と書かれたが、後に本文のように改められた。このことにより読者の印象はどのように変わったか、六百～八百字程度の文章にまとめてみよう。							○						○
99	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	下人の心理の変化をわかりやすく筋書きに記して整理してみよう。					○								
100	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	次の(1)・(2)の描写はそれぞれどのような表現効果をつけているか、後の部分にある「きりぎりす」と「にきび」の描写と関連させて考えてみよう。	○												
101	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	老婆の身振や容姿あるいは言動など多くの比喩が使われているが、それらを全て抜き出してその特徴と効果を考えてみよう。	○												
102	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	この小説の中から印象的な表現を抜き出し、その表現力について分析してみよう。	○						○						
103	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	作者はこの小説で何を語ろうとしていたのか、考えてみよう。							○						
104	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	この小説に書かれている時代背景はどのようなもので、それがどのような効果はこの小説に与えているのか、考えてみよう。		○											
105	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	老婆の論理について考え、それが下人の決意にどう影響していったのか、考えてみよう。			○	○									
106	旺文社	高等学校国語総合	小説(一)	芥川龍之介の他の作品、例えば「鼻」や「芋粥」と読み比べて共通性や違いなどについて考えてみよう。									○				

#### 四、『羅生門』で何を読むか

以上のように、これまでの研究者による『羅生門』論と、教科書の学習の手引きについて見てきた。研究者による『羅生門』論においては、様々な主意主張があることがわかる。教科書の教師用指導書においても、これら研究者の論ずる主題が様々掲載されていることは、丹藤博文(1995年)<sup>4</sup>の論からも明らかである。

『羅生門』に関しては、その主題をめぐっても指導書によって扱いがまちまちなのである。これは、教材として多様な読みが成立している、というよりは混乱しているといった方が妥当であろう。《中略》要するに吉田精一以来のエゴイズム説一辺倒のものもあれば、複数の代表的な説を列挙するものもあり、混乱ぶりを露呈している。(155-156頁)

教師用指導書で、主題が乱立している状況にあって、どの教科書の学習の手引きにおいても、下人の感情の変化を捉えること、老婆の論理を整理すること、表現の特徴を理解することの三点を主要な発問として設定している。主要な設問内容はほぼ同じであるのにもかかわらず、教師用指導書で取り上げられている主題は教科書会社によって扱いが異なる。これは、生徒の多様な読みを促し、容認するものであろう。しかし、テキストを読み深めることなしに、生徒の思い思いに主題を読み取り、それを容認してしまうことは、田中実の言葉を借りると、「エセ読みのアナーキー」<sup>5</sup>（17頁）に陥ってしまうことになるのではないだろうか。

多数の読者が存在する以上、読みの多様性が否定されるものではないが、その読みは常に本文テキストに則するものでなくてはならない。では、我々は『羅生門』のテキストからどのようなことを読み取らなければならないのか、考察していく必要がある。

### 第一節 語り（語られ方）の構造

小説は、ある日の暮れ方、羅生門の下で雨やみを待っていた下人の物語である。プロットは比較的簡潔で、雨に降りこめられた下人が、羅生門の上で老婆と出会い、老婆の論理に勇気を得て引き剥ぎをする、というものである。

この小説における実質の登場人物は下人と老婆の二人だけである。しかし、この物語には、もう一人の人物が登場している。「作者はさっき、『下人が雨やみを待っていた。』と書いた」という記述にあるように、平安朝を舞台とする物語を描いた作者自身が、物語内で「作者」として登場する。この「作者」と自称する人物は、この小説における語り手である。すなわち、この「作者」（語り手）による語りが小説を意味づけるのである。この語り手について、田中実（1996 ii）<sup>6</sup>は、次のように述べている。

<語り手>は一方で「平安朝の下人」と言い、それにふさわしく「申の刻」との時間を先に示しながらも、「何分」という近代の時制で時を計る語り方をしている。ここには二つの異なった時制、二つの暦が<語り手>によって表現されている。<語り手>は「一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。」と始まる「平安朝の下人」の物語のなかに分け入り、直接「作者」を自称し、自己を顕在化するだけでなく、今まで続けてきたお話を異化するようにフランス語や二重の暦を使うのである。一方で「平安朝の下人」のお話でありながら、同時に<書き手>自身の時間である<近代>の問題であることを<読者>に明示し、二つの時空を同時に語る重層的な小説表現を表出させるべく仕掛けているのである。（34頁）（下線は引用者）

田中実は、語り手に着目して、テキストの構造を読み解き、平安朝の物語を近代の

問題であるとした。

また、丹藤博文（2010）<sup>7</sup>は、鎌田均の研究報告を取り上げ、次のように述べている。

鎌田は、これらの生徒による疑問なり感想なり印象なりをもとにして、生徒一人ひとりが自分の読みや見方を「なぜ」として再度問い直す仕方で授業を進めていく。とりわけ「読みを深めるための筋道」として「何が書かれているか」から「どのように語られているか」を授業のテーマとしている点に特徴がある。

《中略》

鎌田実践は、「機能としての<語り>」を前景化することで、語り手の登場人物に対する批評を問題化している。そのことで作中の下人が現実世界の状況や老婆という他者に対する認識の仕方を鮮明に浮上させているのである。それはたんに作中人物の認識に孕まれる「無根拠性」を暴き出すばかりではなく、われわれの認識という行為に必然的に伴う「無根拠性」をも照射していると説くのである。つまり、下人の陥った陥穽は現代の読者である高校生に「突き返され」ていることであり、「友人関係・異性への関心・教師との関係・家族との関係」と無縁でないとする。そこに近代小説『羅生門』の教材としての可能性を認めようとするのである。（133-135頁）（下線は引用者）

丹藤・鎌田は、語られ方から、そのように語られることで表現されるテーマ、登場人物に対する批評性を読み取ろうとする。三者とも、語りというテキストの構造を読み取るという点に着目している。

教室で読者の反応（生徒の読み）を問題にする場合、語り手の読者への働きかけを問題としたい。そのような意味で、このテキストにおける語りの構造を看過することはできないのである。しかし、学習の手引きでは、語りに関する設問は設けられていないというのが実際である。

## 第二節 下人の感情の変化と認識の変容

この「作者」は、主人公である下人を、赤くうみを持ったにきびがあり、sentimentalismeの持ち主であるとした。つまり、下人は、にきびが出るような若者であり、その時の感傷、気分が感情が左右されやすい性質の持ち主だというのである。このように語られる下人が、羅生門の上で老婆と遭遇することによって感情を次々と変化させていく。学習の手引きにおいては、この感情の変化に関する設問はすべての教科書で扱われている。

では、その下人の感情、心理はどのように変化していくのか。また、下人の感情の変化の実態はどのようなものであったらうか。

元々、羅生門の下で明日の暮らしに思いめぐらせ、次の日にその迷いを持ちこそう

としていた下人である（この時点で既に盗人になるという考えは持っている）が、楼の上で老婆と遭遇する。誰もいないはずの羅生門の上に人がいると分かり、下人は恐怖と好奇心を起し、暫時は、死臭が気にならぬほどの衝撃を受けた。これは自分の常識に合わないものに対する反射的な興味反応である。

しかし、老婆が女性の死骸から髪の毛を抜いていると知ると、下人は老婆に憎悪の念を抱く。ところが、この憎悪は語り手によって言い換えられる。下人はこの時、行為主体である老婆に対してではなく、あらゆる悪に対して反感を覚えたのだ。しかもこの時の下人は、この老婆の行為が、悪であると断じる根拠を持っていない。にもかかわらず、その場の状況と感情に任せて悪と断ずる。その上、憎悪の対象であった、特殊な状況下にある老婆の行為を、一般悪に置き換えてしまう。ここで語りの構造は、特殊な事象を一般化する論理を下人に展開させるのである。

そして、下人は老婆を追い詰め、押し倒す。老婆の生死が自分の意志に完全に支配されているのだと意識すると、途端に、憎悪や反感は消えうせ、得意と満足が後に残るのである。老婆を抑え込んだことの征服感に酔い、反感や憎悪は姿を消す。下人が老婆に対して抱いた反感は、突発的で、極めて瞬間的な正義感であったと言える。そして、この感覚的な反応下において、下人は少しも老婆を認識していないという点に注意しておきたい。

また、下人は、老婆に髪の毛を抜いていた理由を聞くと、その答えが平凡だったため、失望し、再び老婆に対する憎悪と侮蔑の心が出てくる。この憎悪は、それまでの「すべての悪に対する反感」とは少し異なり、老婆自身に対する侮蔑の意味合いが強くなる。下人は、自分の期待に反して全く平凡な回答をよこした老婆に、自分勝手に憎しみを抱くのである。平凡な、という感覚は、下人の価値観によるものでしかなく、老婆の実態に即するものではない。下人の感情変化は、常に感覚的・瞬間的であり、老婆と同じ立場に立ち会う（老婆を認識する）ことなしに、自分の中にある既存の価値観や感覚だけで物事を判断し、行動しているのだ。

老婆は下人の顔色が優れないのを感じ取ると、必死で自分を正当化しようとするが、下人はにきびを気にし、冷然とこれを聞いている。死骸の髪の毛を抜く理由が平凡だった老婆に対し、下人はすでに興味をなくしている。先ほどまでの憎悪は、この時すでに全くと言ってよいほどにもっていない。

しかし、老婆の弁明の中に、下人は一つの勇気を得る。それこそがまさに、盗人になるという勇気であった。老婆は、都の衰微に翻弄され続ける自分と、蛇を魚と偽って売る女の関係性、悪を黙認してきた経緯から、その特殊な状況下における自己の行為の正当性を主張しようとしたのである。下人と老婆は、この羅生門で初めて出会ったのであり、羅生門に来る以前にあった老婆と女のような関係はなかった。しかも、

数日前までの下人は、老婆のような困窮極まる生活ではなく、雇われ人であったのだ。この点において、老婆の経験した特殊な状況は、下人に同じ立場に立つことを許していない。しかし、下人はここで再び一般化の論理を用いることになる。特殊な老婆の論理を一般化し、自分に都合の良い表層（悪に対する悪は許される・生きるための悪は許される）のみを自分にあてはめたのである。

そして、この勇氣は、下人の中に初めて湧き上がってきた考え（＝認識の変容）ではない。楼の上で老婆と対峙する以前から持っていた考えであり、その考えを、老婆と同じ立場に立つことなしに、一般化の論理によって自分に置き換えただけなのである。

以上のように、下人は老婆の行為や発言に感情を次々と変える。そして、その過程において下人の認識は一度たりとも変容していないのである。sentimentalismeとは、単なる感傷的な気分をいうのではない。ここでは、下人の、感情に左右された行動、特に、老婆と対峙した際の、認識が変わることなく起こる刹那的な正義感や征服感、一般化の論理などであり、生きるためのエゴイズム（＝自己中心的な考え）の問題というよりは、認識の問題なのである。

### 第三節 語りの批評性

「作者」は、このような下人を夜の底へ駆けおりさせる。そして、「下人の行方は、誰も知らない」と下人について語ることを終える。「作者」は、引剥ぎをした下人の行為を、善とも悪ともしない。しかし、下人の駆け下りた先は黒洞々とした闇の中である。ここにこそ「作者」の下人に対する批評性が表れている。語りは、改稿によって、強盗を働きに急ぎつつあった下人を夜の闇に駆け下りさせた。そして駆け下りた下人の先には少しの明るさも見いだせないのである。そう語ることによって、下人を静かに、しかし鋭く批判していると言える。

しかし、語りの批評は下人だけに向けられているのではない。この物語は平安朝の物語であるはずである。それにふさわしく、語り手は申の刻という時制を使っている。だが、同時に、分という時制をも、テキストに持ち込むのである。加えて、sentimentalismeというフランス語をも使って下人を表わす。平安朝の下人を、「作者」自身の時代の言葉で表すことにより、平安朝の物語を語る「作者」の現代性を提示しているのだ。つまり読者は、平安朝の下人の物語として読みながら、その構造によって現代性をも読むことにもなるのである。そして、下人を批判的に語ることによって、現代の読者をも批判しているのだ。羅生門という特殊な状況下における下人への批評性は、語りによりすべての読者への批評性へと一般化されるのである。

つまり、『羅生門』のテキストは、下人のsentimentalismeを批評するとともに、現代の我々、しかも、とりわけにきびを持つような若者も共通して抱えているsentimen-

talismeという問題を同時に批評しているのである。

我々読者は、主人公がどう行動しているか、感情がどう変化しているのかということを読み取る事を基礎として、さらに、そのテキスト（語り手）が主人公をどのような人物として捉え、描いているかを読まなければならない。そうしたときにはじめて、生徒たちの価値観は揺らぎ、変容し、作品と関わり合うことができるのではないだろうか。

## 五、今後の展望

ここまで、先行研究や教科書学習の手引きを参考に、自分なりの『羅生門』解釈を行ってきたわけであるが、これを授業するにはどうすればよいだろうか。ここでは詳しい案を提示する紙面はないが、いくつかの発問例を記しておく。今後は、生徒の認識を揺るがすような羅生門の授業の具体について考察を進めたい。

### 第一項 登場人物の認識のありようを捉えるための発問

- 下人はなぜ老婆に憎悪したのか。
- 老婆に対する憎悪が、あらゆる悪に対する反感に変わったのはどういう論理か。
- 飢え死にしないためには仕方がないという老婆の論理を、下人はどのように理解したか。また、下人の了解した論理は老婆の主張する論理と一致するか。
- 老婆に対する憎悪があらゆる悪に対する反感に変化したことと、下人が老婆の論理を自分に当てはめたことに共通点は見られないか。
- なぜ下人は積極的に盗人になることを肯定するだけの勇気が出ずにいたのか。
- 下人はどのような人物として描かれているか。
- sentimentalismeという言葉は下人のどのようなことを指しているか。

### 第二項 書き手が提示している認識の問題を捉えるための発問

- なぜフランス語や現代の時制を平安朝の物語の中に用いているのか。
- 「下人の行方は、誰も知らない」と結ぶことの意味は何か。また、なぜこのような終わり方をする必要があったのか。
- 作者は読者にどのような問題を提示しているか。読者の中に何を起こそうとしているか。

---

1 田中実 序章 <読みのアナーキー> = 「還元不可能な複数性」を超えて 『小説の力―新しい作品論のために』 大修館書店 1996年2月20日

2 丹藤博文 「羅生門」（芥川龍之介）の授業実践史―『羅生門』の行方は誰も知らない― 『文学の授業づくりハンドブック第4巻―授業実践史をふまえて―中・高



等学校編』 田中宏幸・坂口京子編 溪水社 2010年3月31日

3 『《羅生門》への途—方法の獲得—』森正人（熊本大学/1991-11-29）文学部論叢，  
35（文学篇）：220-200 <http://hdl.handle.net/2298/19698>

4 丹藤博文 三 批評する読者—『羅生門』（芥川龍之介）— 『教室の中の読者たち』 学芸図書株式会社 1995年4月10日

5 1に同じ。

6 田中実 批評する〈語り手〉 —芥川龍之介『羅生門』 『小説の力—新しい作品論のために』 大修館書店 1996年2月20日

7 2に同じ。

—かいの・あきひろ 日本文学科四年生—